

発刊に寄せて

高坂 健次

ここに私たちの大学院 GP プログラムとしての書評誌『KG/GP 社会学批評 (*KG/GP Sociological Review*)』を発刊する。

書評誌を発刊するというで私の頭に去来したのは、*L'Année sociologique* (『社会学年報』1896～) という雑誌のことである。この雑誌は、周知のとおりデュルケムが主宰し、発刊した雑誌である。別段、書評専門誌というわけではなく、社会学論文中心の雑誌である。デュルケム自身が書いた力作が多く掲載された。デュルケムと彼の甥のモースとが共著で執筆した『未開社会における分類の概念について』といった、後に単独書として発行されたものも、確か、最初はこの雑誌の巻頭を飾ったものではなかったか。本雑誌はそのようなものではあったが、少数の主論文以外は「分析」と称して実に夥しい数の書評からなっていたのである。ページ数にすれば、たとえば、第一巻(1896年)は主論文の部分が100ページ余り、書評による「分析」部分が450ページほどからなる。つまりは、書評の部分が相当部分を占めているのだ。

書評部分は、一般社会学、宗教社会学、道徳・法の社会学の部分など、後のデュルケム社会学体系を彷彿とさせる構成からなっている。取り上げられている書物は、フランスで発行された社会学関連(法律、宗教、民俗、人類学などに亘る)のものをはじめ、ドイツで発行されたものも多い。ドイツの社会学と深い関連があったことは、第一巻の巻頭論文をデュルケムとジンメルが飾っていたことから伺える。そしてそのジンメルの *Soziologie* (1908) は後にセレストアン・ブーグレが第6巻(1906-1909)で間髪を入れず書評をしている。

日本社会学会の学会誌である『社会学評論』を例にとってみても分かるけれども、一冊の雑誌のなかに、論文と書評のそれぞれセクションを設けているばあい、論文の部分のほうが圧倒的に多いのが普通だ。むろん、アメリカ社会学会の書評専門誌である *Contemporary Sociology* というものもあるけれど、これは社会学として特定の主義主張で貫かれているわけではない。それに対して、*L'Année sociologique* は、一冊の雑誌のなかで論文の部分より書評部分が大きく、加えて主義主張があるところに特徴がある。

後にデュルケム学派と呼ばれるようになった考え方や立場は、実は、*L'Année sociologique* に掲載されたこの夥しい数に上る書評を通して築き上げられていった、というのが私の理解である。

デュルケムはその学説を練り上げるうえで、多くの門下生を動員しながら、書評というかたちを借りながら、他のすべての社会学関連の著書を評価し相対化していった。逆に言えば、他の社会学関連著書を「読む」「評す」ことを通して、自分たちの社会的なものを見方を作り上げていったのだ。書評という知的営み、それも集団的な知的営みは、このような機能を担っているのだ、という思いが私にはある。

翻って、私たちの大学院 GP は「社会の幸福に資するソーシャルリサーチ：ソシオリテラシーの涵養」というものである。「社会の幸福」「ソーシャルリサーチ」「ソシオリテラシー」といったところが鍵概念だ。その内容、意味するところについてはホームページに委ねるとして、私の思いは、社会

学専攻の大学院生には方法論的に早い段階で偏り過ぎないでもらいたいというところにあった。つまり、フィールドワークを中心に研究を進めようとする大学院生が統計や数理や理論にまったく不案内ということであって欲しくない。また数理や統計を専門に武器にするからといって、学説史や人類学的モノグラフに関心を示さないということであって欲しくない、等々。むろん、いくら「専門バカ」と呼ばれかねない人であっても実際にはそれほど極端なことはないのかもしれないが、それでも最近の大学院生は早い段階で方法的に過剰に専門化してしまう（それに比例して、他の方法については極端に無知になってしかも省みない）傾向があるように私には映る。

ここで私的経験に及ぶことを許されたい。その昔、私がピッツバーグ大学に居たあるとき、ピーター・ブラウが講演に来た。講演が終わった途端、質問が相次いだ。ある現象の分布がバイモーダル（2峰的）かトライモーダル（3峰的）かといった比較的単純な質問だったように記憶しているが、それからそれへと質疑が発展し、ブラウは返答に窮しながら「自分は統計にも数理にも明るくないので（分からない）」と頭を掻いた。ピッツバーグ大学の社会学部にはファラロにドレイアン、ハモンといった数理に明るい兵たちが揃っていたからブラウはタジタジだったのだ。しかし客観的に見れば、ブラウ自身、むしろ平均的な社会学者よりはよほど統計にも数学にも通暁していた、と私には見受けられた。ダンカンとの共著になる名著 *The American Occupational Structure* (1967) や、*Inequality and Heterogeneity* (1976)、J.E.Schwartz との共著 *Crosscutting Social Circles* (1984) などの著書は、ブラウ自身が統計的リテラシーがあったればこそ実現した稀有な共同研究であったと思う。

私自身は上に述べたブラウに関するエピソードに出会ったときの新鮮な感動を忘れがたい。そして、ブラウが自らの仕事を高め活かすことができたのは、自分の専門外の発想や方法についての、ある程度の「リテラシー」を有していたからだ、と固く信ずるようになったのである。そのことを証する直接の証明の手立てはないけれども、私自身についてもこれまでの門下生についても同様の確信はある。

かつてのように「リテラシー」を涵養するのに個々の努力では間に合わない。ますますの専門化の流れに敢えて抗して「リテラシー」涵養の機会を制度的に設けておきたい、という強い思いが私にはある。

「発刊に際して」の結論を急ごう。この書評誌を通して、言わば「ソシオリテラシー派」というものの構築をめざしたい。それは決して排外的な「学派」ではなく、異なる知的背景をもったものが大学院で寄り合い、そしてそこから出でてしっかりとした専門家に育っていくまでの通過点を支える「知的グループ」の構築をめざすものである。もっとも、志は高くも、足元は幾分心もとないところがあることを認めざるをえないけれども。

(こうさか・けんじ 大学院 GP プログラム・リーダー)